



Title	Dreamer'における発展と体験について : KeatsのHyperionの解釈に関連して
Author(s)	竹中, 靖治
Citation	大阪外大英米研究. 1962, 3, p. 54-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98943
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

‘Dreamer’ における発展と体験について

Keats の Hyperion の解釈に関連して

竹 中 靖 治

I

Keats にあってその強烈な感覚的耽美趣味と共に 忘れられないのは 既に多くの学者、批評家が指摘するように、人間生活の 現実に対する 深い関心である。詩の魔境に導き 入れられその 驚異をうたった *On First looking into Chapman's Homer* より遅れること僅か一ヶ月余り、その最初の長篇と目される *Sleep and Poetry* の中で ‘realm of Flora and Pan’ を通り抜けた後

And can I ever bid these joys farewell?
Yes, I must pass them for a nobler life,
Where I may find the agonies, the strife
Of human hearts . . .
(1)

と早くも人生の詩人であろうとする抱負を吐露している青年 Keats であった。更にそれより二年後のある書簡に、although I take Poetry to be chief, there is something else wanting in one who passes his life among Books and thoughts on Books. と自己が詩人であることの自覚と同時にそれにもなう危険を早やくも悟っているのである。かくてそれから数ヶ月後には友人 Dilke との Scotland 方面への徒歩旅行となるのであるが、その道中から弟 Thomas と友人 Bailey に書き送った手紙には夫々、I shall learn poetry here and shall henceforth write more than ever, for the abstract endeavour of being able to add a mite to that mass of beauty which is harvested from these grand materials, by the finest spirits, and put into ethereal existence for the relish of one's fellows / I should
(3)

not have consented to myself these four months tramping in the highlands but that I thought it would give me more experience, rub off more prejudice, use me to more hardship, identify finer scenes, load me with grander mountains, and strengthen more my reach in Poetry, than would stopping at home among Books even though I should read Homer. とのべ、詩人としての同胞への奉仕を思い、そのための自己の発展が体験の充実によらなければならない旨を強調している。⁽⁴⁾旅から帰った詩人は程なく *Endymion* 創作の筆をとることになるが、この主人公の Cynthia との合体に象徴される美への到達は、様々な苦難を経て詩人が内的成熟に達してゆくという Keats にあって以後の主題となっている「体験と発展」についての最初の表現となっている。この *Endymion* には多くの非難が集ったが、Keats はそれに対しても、J. S. is perfectly right in regard to the slip-shod Endymion. That it is so is no fault of mine. -No! - though it may sound a little paradoxical. It is as good as I had power to make it—by myself. Had I been nervous about its being a perfect piece, & with that view asked advice & trembled over every page, it would not have been written と毅然と言い放っている。「slip-shod⁽⁵⁾ でもそれは自分のせいではない」というのはやがて体験を重ねて発展してゆく自分に秘かに期するところのある Keats の自信の程を物語っている。

Keats は又人生を多くの部屋を持つ邸にたとえ、その一つ一つを通ってゆく過程を体験を経て次第に真実を体得してゆく人生になぞらえていた。その中で自分の詩的恍惚境発見の体験から、そのような人生の一期を ‘Chamber of maiden-Thought’ と呼び、又旅行の直前頃の自分の位置については、この「処女思想の部屋」に⁽⁶⁾いながらその内部が次第に陰ってきて、この人の世が misery や heartbreak や sickness や oppression にみちていることに気付く所にきているのだと考えるのである。

Keats にとってはこのような体験による成熟発展は更に 人間社会 の全体についても考えられていた。例えば Wordsworth が Milton より深遠なのはそれだけ人類全体が進歩したからだと云っている。この思想は又逆に個人々々の体験による発展が人類全体のそれに連るという素朴な理想主義的社会観ともなっていることが次の言葉の中に見られよう。Man should not dispute or assert but whisper results to his neighbour and thus by every germ of spirit sucking the sap from mould ethereal every human might become great, and Humanity instead of being a wide heath of Furze and Briars with here and there a remote Oak or Pine, would become a grand democracy of Forest Trees.

(8)

このように人間の発展性を信頼し、それが真理に向っての前進である故にそれに価値を見出していた Keats が、フランス革命後の当時の Tory の支配する自国の反動的な政治的雰囲気批判的であるのは当然である。一八一八年十月のある手紙はこのような Keats の政治観を伝えているが、その後間もなく執筆された新しい美の神 Apollo が古い支配者 Saturn を失墜させるという *Hyperion* の物語りがこのような政治的関心によって解発されたであろうことは間違いなからう。しかもそこに見られる美の神 Apollo 誕生の苦悩はやはり詩人の発展の過程における体験の苦悩を象徴するものであろう。「巨大な未知が Apollo を神にする」ことは体験の苦悩の代償としての真理・美の体得である。作者が Oceanus に云わせている ‘the first in beauty should be first in might.’ という掟も発展するが故に真理・美を把握し得る人間の優越性を認めていた彼の思想の命題表白である。しかもそれがこの Apollo の場合 ‘names, deed, grey legend, events, rebellions, majesties, sovran voices, agonies, creations, destroyings’ という諸々の体験の受容となっている点で Endymion の主題を受け継いでいるということが出来るのである。

(10)

II

Keats の考えていたこのような人間の「発展」とは換言すればより深い真実、より高い美の認識ということになるであろう。そうして彼が上述のように「体験」というものをあれ程熱烈に求めたのもそれを通しての自らのそう云った意味での発展性を信じていたからである。しかし彼のような詩人にとってこのような内面的発展の契機となる「体験」とはそもそも如何なる意味を持つものであろうか。人がいわゆる体験によって内面的な成長発展を遂げるものならば、生活上の数限りない事象に反応する鋭敏で複雑な感受性こそ願わしいものであるに違いない。H. Read は心理学的立場から外的刺激に反応し易い人間のタイプを ‘personality’ という概念で、逆に無反応なタイプを ‘character’ という概念で夫々説明している。現実的には両者は個性や感受性の強さや質の相対的な差異として考えるのが適当であると思われるが、今便宜上両者を文字通り(11)に解釈すれば、後者は外的刺激によって内面的な動揺変化を蒙らないので一定不変の鮮やかなタイプとして捉え易いが、他面それ故にそこには「発展」の概念は否定される。従って Keats が重視するような内面的発展に関連する意味での「体験」は ‘personality’ のものでなければならなくなる。しかしそうかといって ‘character’ に文字通り凡ゆる体験が無縁であると考えるのは事実に反するであろう。それはむしろ、例え同じ「体験」という言葉で表わされるにしても、両者における体験には質的な差異があると解すべきものではなかろうか。即ち ‘Personality’ における体験は内面的な、しかも芸術家や詩人の場合には、美的価値判断に関連するものであり、他方 ‘character’ におけるものは実際の能力や利害関係に連るものであろう。前者は一口に言って美的体験と名付けてもよく、後者は卑俗な経験家、現実主義者の意味するそれである。ところがこうした体験の質を決定するものは何かと考えて見ると、それはやはり人の資質でなければならぬであろう。逆の観点からいえば人は否応なしに夫々自分に応しい体験をせざるを得ないであろう。例えば Rilke で

あるが、彼が如何に「詩は体験である」と云っても、その体験となる外的刺激は卑俗な経験家の心にだったならば何の痕跡をもとどめない種類のものであるかも知れない。この詩人の詩によって対応的に跡付けられているといわれる彼の精神遍歴の過程での二つの画期的な体験、即ちトルストイを介しての「ロシヤ体験」及びロダンとの邂逅も彼にして始めて「発展」の契機としての「体験」となし得たものであろう。又 T. S. Eliot は作家の心の中に生起する心象を次のように語ることによって詩人における体験の本質をも同時に云い表わしている。

Only a part of an author's imagery comes from his reading. It comes from the whole of his sensitive life since early childhood. Why, for all of us, out of all that we have heard, seen, felt, in a lifetime, do certain images recur, charged with emotion, rather than others? The song of one bird, the leap of one fish, at a particular place and time, the scent of one flower, an old woman on a German path...such memories may have symbolic value, but of what we cannot tell, for they come to represent the depth of feeling into which we cannot peer.⁽¹²⁾

ところでこのような体験を可能にさせる詩人に特有の感受性の左証となるものは結局その想像力であるだろう。彼は自分の体験的素材を通して想像せざるを得ないからである。そうであるならば彼の想像内容の質はその体験の、従ってその感受性のそれと密接な連りをもたざるを得ないであろう。従って、又より高度な感受性を表わす概念としての‘personality’はより豊かな想像力を予想させるものともなる。ところで感受性が拾い上げた互に独立した体験的素材に次元の異った有機的統一を与えるものが想像力であるとされているが、その豊かさは詩人にある特有の精神の自由さを与えると共に彼を現実の奴隷である卑俗な経験家からも峻別するものである。この経験家が重んじるものが「事実性」であるならば、詩人は現実との関係において成り立つが、しかも同時にそれに捉われないある真実を想像によって捉えることが出来る。詩人はこのよう

な真実を事実よりも真であり美であるとして受けるのである。Keats が what the Imagination seizes Beauty must be truth⁽¹³⁾ といった直後、 whether it existed before or not. と付け加えているのはこのような美的体験の持つ「真実味」を強調したものに外ならない。Keatsが愛した‘truth’とはあくまで「事実」そのもののことではなくて、彼の想像力の裡にある物の真実美であった。彼が to me manners and customs long since passed whether among the Babylonians or the Bactrians are as real, or even more real than those among which I now live. という時それは 美的体験である⁽¹⁴⁾という限りにおいてほんとうである。以上のべたところにより、Keats が如何に体験を求めたといっても、それはあくまで窮局的には想像力の所産に価値を認める詩人としての立場からするものであるということが忘れられてはならないのである。

ところでこのように想像の行為を重視する Keats は更に真実と 想像作用の関係について、Adam’s dream will do here—he awoke and found it truth.⁽¹⁵⁾ とのべているのである。これによると詩人は結局 ‘dreamer’ であるということになる。事実 *Endymion* や *Hyperion* や *The Fall of Hyperion* においては「夢見」を契機として真実や美の体得が実現されていると見られる点には確かに想像と夢のアナロジーが読みとれるのである。Keats がこのように想像の行為を行う詩人を dreamer とみなすならば、この dreamer における体験こそが美的に価値ある体験であり得るわけであり、かつそのような体験の受容が Read の名付ける ‘personality’ の持つ高度の感受性により可能ならば、Keats が希求する詩人の発展は ‘dreamer’ と ‘personality’ という互に密接に関連した二つの資質の上に可能であるといってもよいであろう。従って他方いわゆる ‘character’ がこのような意味での 体験に無縁であり、同時にそれが内面的固定を意味するのであれば、それには Keats が求めた真実・美のより深い把握という意味での「発展」の概念も成立 しないわけである。事実 Keats は想像行為を行う詩人を夢見るアダムにたとえた時の手紙の中で更にこ

の ‘character’ と考えられるタイプの人間を天才詩人と比較しているところは詩人自身の深い自己省察につながっていて興味深いものがある。即ち、Men of Genius are great as certain ethereal Chemicals operating on the mass of neutral intellect—but they have not any individuality, any determined Character—I would call the top and head of those who have a proper self men of Power. ⁽¹⁷⁾ というのであるが、更にそれから約一年後には同じ問題に及びながらも彼の得意な具体的な描写が一段と興味をひく。

As to the poetical Character itself (I mean that sort of which, if I am any thing, I am a member…) it is not itself—it has no self—it is every thing and no thing—It has no character—it enjoys light and shade; it lives in gusto, be it foul or fair, high or low, rich or poor, mean or elevated—It has as much delight in conceiving an Iago as an Imogen. What shocks the virtuous philosopher, delights the camelion Poet. It does no harm from its relish of the dark side of things any more than from its taste for the bright one : because they both end in speculation. A Poet is the most unpoetical of any thing in existence; because he has no identity—he is continually… filling some other Body—The Sun, the Moon, the Sea and men and Women who are creatures of impulse are poetical and have about them an unchangeable attribute—the poet has none; no identity…when I am in a room with People if I ever am free from speculating on creations of my own brain, then not myself goes home to myself: but the identity of every one in the room begins so to press upon me that I am in a very little time annihilated.

勿論詩人に ‘character’ とか ‘identity’ ⁽¹⁸⁾ がないとう Keats の言葉を額面通りに受け取ることは正しくないであろう。しかし Keats がここで指摘しているのは鋭い感受性のために絶えず流動し、更新する詩人の内面と、対象に自己を投射するその力強い想像力であり、そこには同時にそのような詩人としての

自分とは対極的な存在である確固たる性格をそなえた ‘man of power’ に対する対抗意識すらも感じとれなくはない。実際ここにいる「カメレオン詩人」とは Shakespeare のことであり、一方の「有徳の哲人」とは Johnson 博士であることは C. Spurgeon の証するところであるが、ここには明らかに Keats の性格人 Johnson に対する揶揄の混った挑戦的筆致がうかがえよう。Keats は又 ‘character’ の陥り易い独善や偏狭の好例を友人 Dilke に発見して、Dilke was a Man who cannot feel he has a personal identity unless he has made up his Mind about every thing. The only means of strengthening one’s intellect is to make up one’s mind about nothing — to let the mind be a thoroughfare for all thoughts. Not a select party…All the stubborn arguers you meet with are of the same brood. They never begin upon a subject they have not preresolved on. They want to hammer their nail into you and if you turn the point, still they think you are wrong. Dilke will never come at a truth as long as he lives; because he is always trying at it. He is a Godwin-methodist.⁽²⁰⁾

とのべ、公式的、画一的な考え方が真と美に到達する万能薬的効力を発揮するものでないことを主張することによって逆に多様複雑な体験受容の必要を指摘している。又友人の画家である Haydon によって Never for two days did he know his own intentions… I was much attached to Keats, and he had a fellow feeling for me. I was angry because he would not bend his great powers to some definite object and always told him so…he grew irritated because I would shake my head at his irregularities, and tell him that he would destroy himself. と語り伝えられている Keats は ‘personality’ に特有の体験受容の有様が⁽²¹⁾ 実際家、行動家のそれとは対照的であることを、now it is more noble to sit like Jove than to fly like Mercury — let us not

therefore go hurrying about and collecting honey, bee-like buzzing here and there impatiently from a knowledge of what is to be aimed at; but let us open our leaves like a flower and be passive and receptive—budding patiently under the eye of Apollo and taking hints from every noble insect that favours us with a visit とのべている。Keats は同じ手紙の中でこのような態度を ‘passive existence’ と呼んでいるが、その「受身」であることの意味は現実生活の領域での活動家、即ち実際的な人間、—Keats もいうように その 典型は ‘man of power’ であるが—が「能動的」であるという意味において 明瞭となる。重要なのはこのような 受身の 姿勢 における 体験 こ そが 実は ‘personality’ における 最も 価値ある 体験 となり得ることであり、他方そのような姿勢は Goethe のいう「生活の激流の中で造られる性格(Charakter)」即ち 実際家にとっては無価値なものとなろう。Keats が *Hyperion* を書いたのは先に引用した ‘men of genius’ と ‘men of power’ を比較している手紙の直後と推定されるのであるが、人間存在の根本的な価値関係をより深い真と美の認識に向っての精神的な発展性の中に捉えた Keats は自己認識の痛切さの余り、又当時の反動的な政治的風潮に刺戟されて、そうした現実を半耳つている ‘man of power’ の非発展性に対して自己の価値判断を挑まざるを得なかったであろう。新しい神 Apollo と古い支配者 Saturn の関係はこのようにして ‘man of genius’ 即ち ‘poet’ と ‘man of power’ の価値関係を象徴的に示すものと考えられる。

III

周知の如く Keats は殆んどその全生涯にわたって Shakespeare に私淑していたが、そのことは常に彼に詩及び詩人という存在についての意義や価値についての判断の基準を提供していたし、又詩人としての彼の向上心を刺戟して

いた。彼は魂 (soul) の不滅を信じる旨を書簡の一つに記しているが、それも Shakespeare の詩魂に参入することによって得られた信念であったろう。しかし、上述のように彼が自己の発展のために体験の充実を願い、人間の現実世界に目を凝らしてゆく時、そこに彼が発見したものはその少年時代に彼の心を虜にした Flora と Pan の仙境とはおよそ違った悲惨と醜悪の中にた打つ人間の姿であった。そうして当然そこでは彼の素朴な理想主義的人間観と自己の直接的体験をも含めた苛酷な現実認識とが心の中で葛藤しないわけはなかった。そのような時、彼が如何に「Jove のように泰然として」体験を受容するのだといっても所詮それは理想をいったものに過ぎない。そうしてこの苦しみは又彼生得の著しい素質である感覚的耽美趣味への郷愁となって激化した。しかし時にはこの苦しみを耐え難く感じながらもやがて彼を一つの境地に導いていったのはやはり Shakespeare の存在であった。彼は不安や懷疑の中に安住し、現実のあらゆる事象を ‘speculation’ と観る不思議な能力を ‘negative capability’⁽²³⁾ として夙に Shakespeare に認めていたが、それは要するに徹底した芸術家としての超越的立場であるといえるであろう。しかしそれは多分に理想主義的且つ人道主義的な Keats にとって容易には受け入れ難い境地であるに違いない。と同時にしかもそれは又そうした現実との関連においては自分が深くそうであると自覚している非実際家 ‘dreamer’ としての負い目としても感じられたことであろう。しかし遂に自分が苛酷だとみる現実世界が実は永遠であると信じる魂の創り場として必要であるという彼のいわゆる ‘vale of soul-making’⁽²⁴⁾ の哲理に到達し得た時、それは又詩人としての彼には、あらゆるものには美があるという原理、‘principle of beauty in all things’⁽²⁵⁾ となったものである。それは芸術家の立場による現実克服の哲理、ベシミズムの徹底から逆に打ち出された人生肯定の最高形式としての悲劇的精神であるといえよう。詩人にあってこのように現実にも身を潜め同時にそれを超越することは感覚や想像の狹隘や独善や恣意の危険から詩人を救うと共に現実にとわかれた卑俗な経験

家や実家であることから彼を守るのである。 *Hyperion* の放棄から数ヶ月、翌一八一九年の冬から春にかけて続けざまに生まれた一連の ode を中心とする数々の名篇は現実には浸透された想像が堅固なフオルムの中に結晶しているが、その殆んどがこのような哲理に達するまでの詩人の内部的葛藤—理想と現実の相剋—の痕跡をとどめていることはけだし当然であろう。そうして彼はこれらの一連の作品に続く最後のものである *The Fall of Hyperion* においてそのような苦しさの最後の清算を試みているかのようである。その執筆直前と思われる頃、彼は I hope I am a little more of a Philosopher than I was, consequently a little less of a versifying Pet-lamb. と手紙に⁽²⁶⁾ 洩らしているが、本篇がそのような境地の中にあつて、‘dreamer’ をもって出発し、それから発展して如何に ‘poet’ の名に適わしい存在に到り得るかという ‘dreamer’ 発展の運命を主題としているのも「魂創りの谷間」の哲理が表わす微知に達して更に一步発展した精神が彼に取りあげさせたものであろう。

Keats によって夢や眠りが詩人がそれによって真や美に到り着く契機と考えられていたことが「アダムの夢」のたとえによって明らかであり、又そのような想像力の象徴化はすでに *Endymion* や *Hyperion* の中に認められることもすでに触れた通りである。さて今この *The Fall of Hyperion* の物語りでも主人公 ‘I’ は眠りに陥いるが、やがてきめると、ついで彼は半死の目にあいながらもようやく救われて Moneta の司祭する社会の祭壇の前に立つ。そうして祭壇の方から聞えてくる Moneta の声との問答が始まるが、この問答の最初の部分、即ち 136 行から 181 行においてこそ当時の作者の心中にある核心的な問題が提起されていると思われるのであり、それは同時に本篇が *Hyperion* に対して新たな価値を有する所以であるとも考えられるのである。Moneta によれば主人公 ‘I’ が救われたのは「世の悲しみが自分自身の悲しみであり、そのため心は休まらず、しかも同時に彼が夢想家 (dreamer) だから」である。更にその声は説く。巨大な世界苦 (giant agony of the world) をその身に感じ、人類同胞のため献身する人間であつても、主人公のような夢

想家でなく、平凡な人間の顔以外の驚異や、陽気な話し声以外の音楽を求めない種類の人間、即ち目前の事実や現象以上に物を見ようとせずそれだけで満足するといった種類の人間は、主人公のように救われてこの祭壇までやってくることはないのである。そういう人間にとっては欲びは常に欲びとして、又苦しみは苦しみとして判然と区別されているのに対し、主人公のような夢想家には日々が毒されている。つまり夢想家はその物の深い真実を探り出す想像力によって欲びにも苦しみにも、善なるものにも醜なるものにも等しく価値を発見する故に単に純粋に欲ばしいもの、問題なく美しいものといったものは彼にとっては存在しない。その点、夢想家でない者はたとえ苦しみはあっても純粋な欲びをも又享受出来る。Keats は先にこのような夢想家に特有な認識を *Ode on Melancholy* や *Ode to a Nightingale* 更には *Lamia* において表現したと考えられるが、これは換言すれば夢想家が非夢想家に対して持っている負い目であるといえよう。そうして Moneta もいうように夢想家である主人公の死からの救済はその苦しみに対する代償なのである。事実ここで Moneta によって強調されているのは主人公の場合のような救済の対象となる人間の資格付けに關してである。そうしてこの資格というのは即ち人間苦の共感者であり、同時に夢想家であるということである。換言すれば、Keats がそれまでの自分を評して ‘versifying Pet-lamb’ と名付けたような甘やかされた夢想家ではなく、現実を凝視し、人間苦をわがものとし、しかもそれに対する関係においてはあくまで實際的、行動的にそれに働きかけるのではなくて、やはり夢想家にとどまるというような存在である。従って、作者が Moneta に ‘dreamers weak’ とか ‘thou art less than they (i.e. no dreamers, no visionaries)’ と⁽²⁷⁾ かいわせている点にあくまで夢想家であるとの痛切な自己認識と裏腹になった自己との対極的な存在に対するコンプレックスを感じることは見当違いではあるまい。Goethe のいう「生活の激流」の中での活動によってその存在を表わす種類の人間こそ Keats 自身がすでに自己との対比において描写したように、その鮮やかな力強い不動の性格の故にその存在を力強く印象付けるということ

と、即ち ‘man of power’ であるという意味で、一方のカメレオンのように
掴み所のない夢想家は確かに影の薄い存在でしかない。そこを Keats は ‘less’
とか ‘weak’ とかいったのであろう。しかもなお彼がそういう意識を背負い
ながらも試みているのは、そのような夢想家の实际的行動人に対する半球の主
張、自己の存在価値についての必死の自己問答である。実際 Keats が「夢
想家」であるとの自己認識に立脚して「詩人」への発展を考えていた根底には反
って實際家の度し難い力強さが意識されていたのではなかろうか。 ‘man of
power’ が行為によって人を動かすものであれば、 ‘dreamer’ は真の詩人に
発展することによって始めて創り出すことの可能な美と真によって人を内面的
に動かさなければならないのである。このように見れば *Hyperion* における
Apollo の誕生と「美において最高の者は力においても最高たるべし」という
命題の意味も一段と明らかになるであろう。

このように意味付けられた ‘dreamer’ の発展線上にあるものが ‘poet’ と
いう言葉で考えられていたということは本篇の induction の部分において
‘fanatic’ と ‘poet’ が対比されていることによって暗示されている。即ち両
者共 ‘dreamer’ である点は同じであるが、‘fanatic’ は一党派 (sect) を喜
ばせるに過ぎない。これは ‘dreamer’ の陥入り易い独善性を指摘していると考え
られよう。確かに豊かな体験を踏まえない単なる「夢想家」の想像内容は妄
想に墮するであろう。そうしてこのような無価値な「夢想家」の超克はこの物
語りで主人公の苦悩の描写により象徴されている体験の受容により暗示されて
いるのである。しかしこの ‘fanatic’ と対比される「夢想家」の理想的な発展
の姿としての ‘poet’ は単にそれだけの名前を与えられているだけで、その本
質については、Keats の友人 Woodhouse が詩人に削除の意図があったとし
て伝えている部分、即ち186行から210行に亘る詩行以外には何ものべられてい
ないのである。従って作者の削除意図を認めるとすれば、この物語りの主人公
は自身によっても又 Monetaによっても遂に ‘poet’ の名を拒まれたままに終
るのである。ところでこの問題部分において登場する ‘poet’ であるが、作者

の削除意図を認めないとすればそれはいくつかの問題や矛盾を生むのである。その第一は、主人公が救われたのは Moneta が説明しているように、彼が「巨大な世界苦」を感じかつ同時に‘dreamer’であるからなのであり、今この部分に見られるように、こうして救われた主人公を前にして別に‘poet’と名付ける存在を称揚することによって、彼を対比的に‘dreamer’だとして貶すことは自己撞着である。第二に、もしこの部分の‘poet’がそれ程称揚するに足るものであれば、救われるべきはむしろその立派な‘poet’であらうし、そうでなくとも、少なくともこの物語りの主人公はそういう‘poet’自身でなくてはならない筈である。しかるに明らかにこの物語りはあくまで‘poet’と名指されることがなく、反って‘dreamer’であるところの‘I’を主人公とし、その運命を辿っているのである。従ってこの部分を生かすとすれば、そのような主人公が苦しみの後に救われて、これから授けられようとしている窮極の真実があくまで Moneta の説明によって資格付けられたような‘dreamer’のものであって、彼と対比的に称揚されている‘poet’のものでない理由が分らなくなるのである。結局このように安易に‘dreamer’と‘poet’を対比することによって‘poet’を片附けてしまうことは本篇の中心的な課題である「詩人」の本質追求の意味を失わせてしまうことになるのである。無論 こうして救われ、Moneta によって真実を啓示されようとしている‘dreamer’であるこの主人公の運命が、Keats が‘poet’でなければならないと考えたような存在のそれであることは本篇に象徴化されている体験の苦悩の描写によって充分暗示されている。しかもなを作者が最後まで主人公に‘poet’の名を冠することを拒んでいるのは、本篇において‘poet’として暗示はされているが、実際には‘dreamer’とだけしか呼ばれない主人公に与えられるべき真実の最後の相貌が作者 Keats に描き切れなかったのと同じ理由によるものと断ぜざるを得ない。何故なら、そのような窮局的真実と確信するものの実現されないところにはその証人であるところの‘dreamer’の窮局的発展の姿としての‘poet’も存在し得ないからである。従ってこの時の作者にとって真実の納得すべき相

貌が不可知なようにその証人である ‘poet’ の本質や真の姿も描き難く、ただ ‘dreamer’ の発展の姿として暗示され志向されるにとどまったのである。

本篇が Dante の「煉獄」にヒントを得ていることは否めないにしても、苛酷な人間生活の現実に対して強い共感を覚えながら、しかもそこから真と美とを汲み取らざるを得ない ‘dreamer’ であることの痛切な徹底においてそれが Keats 自身の声であることは疑いを容れるものではない。H. Muir が Spender の注目すべき言葉としてあげているように、Keats の全作品が苦しみに対する正当化の試みであるならば、その最も端的な表白こそが本篇における主人公と Moneta との対話の中に読みとれるというものである。Hyperion の兩篇が共に未完に終わっていることは取りもなをさず Mnemosyne と Moneta によって与えられた啓示が Keats の体験の終着点でもあったことを物語っている。このような形而上学的問題の処理は明らかにより多くの人生と体験にとって適わしいものであるだろう。

本篇放棄直後、自己のより熟知した体験的素材に戻った詩人の心は *To Autumn* において表現の充足を見出したのであるが、そこに見られる現実的素材の部厚い肉付けを透して発散する清澄さは「作品の清澄さはその詩人の心のそれを表わすものではなく、逆に深刻な動揺に対する必死の抵抗の結実である」という Valléry の言葉を思い出させる。Keats は *To Autumn* の確固たる美と真実に到り着くまでに特に兩 Hyperion と同年春の二、三の ode、それに *Lamia* を生み出した精神に潜むような危機を経てきたわけである。それが「ナイチンゲール」や「憂愁」や「ギリシヤの古童」と異なる点は、そこには理想と現実の調和が慨嘆や憧憬の対象とならずに実現化されていることであり、その高度な完成度が反って他の ode における程我々が問題詮議をおこなう余地を残していないことであろう。その素材の余りな matter-of-factness にもかかわらず、その精神の危機を通り抜けた ‘dreamer’ は一段と高い美と真実を獲ち得たのである。

Keats は ‘dreamer’ の基盤から出発し、Shakespeare においてその理想

を見る ‘poet’ への発展を体験の充実によって果そうと考えたのであるが、その意味する発展は要するに主体と客体が相互浸透を深めてゆくという人間精神の成熟過程の一つの図式として考えられよう。ただ彼の場合、彼が客体である人間世界の現実に沈潜してゆく時、その強い理想主義的乃至は人道主義的人生観が一度苛酷な現実認識をくぐることによって鍛え直されなければならなかったところにその精神的発展過程における苦悩の特殊的性格があるのだといえよう。しかもなお Shakespeare によって導かれ、やがて現実のすべてをあるがままに ‘speculation’ として受け容れるという徹底した芸術家の立場をちり得た時、それは同時にこの苦悩に充ちた現実界を「魂創りの谷間」と考える人生哲学をも彼に与えていたが、そのことは彼が後に残した文学史上の影響の性格にもかかわらず、彼にあって芸術乃至は詩というものが畢竟一つの生き方に過ぎなかったのだということ、つまりその芸術の倫理的性格を物語っているのである。

注

書簡番号と日附けは *The Letters of John Keats*, ed. by M. B. Forman, 4th edition, Oxford University Press による。

- ① l.l. 122-125. ② Letter 63; Apr. 27, 1818. ③ Letter 72; June 26, 1818. ④ Letter 79; July 18-22, 1818. ⑤ Letter 90; Oct. 9, 1818. ⑥ Letter 64; May 3, 1818. ⑦ Ibid. ⑧ Letter 48; Feb. 19, 1818. ⑨ Book II, l. 229. ⑩ Book III, l.l. 114-116. ⑪ H. Read: *Collected Essays in Literary Criticism*, *The Nature of Poetry*. ⑫ T.S. Eliot: *The Use of Poetry and the Use of Criticism*. ⑬ Letter 31; Nov. 22, 1818. ⑭ Letter 98; Dec. 7, 1818. ⑮ Letter 31; Nov. 22, 1818. ⑯ Letter 227; Aug. 16, 1820. ⑰ Letter 31; Nov. 22, 1817. ⑱ Letter 93; Oct. 27, 1818. ⑲ C.F.E. Spurgeon: *Keats's Shakespeare*. ⑳ Letter 156; Sept. 24, 1819. ㉑ W. M. Rossetti: *Life of Keats*, p. 134. ㉒ Letter 48; Feb. 19, 1813. ㉓ Letter 32; Dec. 21, 1817. ㉔ Letter 123; Apr. 15, 1819. ㉕ Letter 186; Feb. ? 1820. ㉖ Letter 128; June 19, 1819. ㉗ Canto I. l. 162; l. 166.

その他の主なる参考資料

- J. M. Murry: *Keats and Shakespeare*, Oxford Univ. Press.
 〃 : *The Mystery of Keats*, Peter Nevil.
H. M. Garrod: *Keats*, Oxford, Clarendon Press.
H. Muir : *John Keats, A Reassessment*, Liverpool Univ. Press.
R. Gitting : *John Keats, The Living Year*, Heineman.
S. Colvin : *Keats, English Men of Letters*, Macmillan.
C. D. Thorp : *The Mind of John Keats*, Oxford Univ. Press.